

第140回 三方限古典塾（'18, 6, 21）

呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その13）

1 世上には只箇の道理有り。これ貪るべく欲すべき的なり。初め数を取るの多きに限らず。何となれば性とする所の分定まり、もと是れ限量なき的にして、終身之れを行へども尽きざればなり。この外は都是れ人欲にして、最も一毫の歎羨の心を萌すべからず。天の人を生ずる、各々一定の分涯あり。聖人の人を制する、各々一定の品節あり。これを担夫の肩輿を欲し、丐人の鼎食を欲するに辟ふ。徒爾に心を勞するも、竟に亦何の益あらん。嗟夫、篡奪の由りて生ずる所にして、大乱の由りて起こる所は、皆其の分内の安んずるに足らざるを恥じて、唯だ分外なるもの貪るべく欲すべきを見るが故なり。故に学ぶ者、心を養ふには、先ず箇の分を知ることを要す。分を知る者は、心常に寧く、欲常に得。欲する所を得れば、自ずから以て身を安んじ、用を利するに足る。
(修身) 疋田140

(意訳) この世の中には一つの道理がある。これは貪り取り、また欲すべきものである。それは最初から数が多いほうが良いとは限らない。なぜなら物事には生まれつき定まった分というものがある。これは元々限界のないものだったが、それは一生求めても尽きないことから限界が定まったのである。この分を超えるものは全て欲によるものであり、わずかでも他人を羨ましく思う心を萌してはいけない。天が人を生む際には、各々の分に応じて一定の限度を設け、聖人が人を抑制するについても、各々の分に応じた一定の節度がある。それは、荷担ぎの人夫が肩で担ぐ籠を欲し、乞食が贅沢な食べ物を欲するのにも限度があるのに喩えられる。

やたらとあれこれ心を弄しても、何の得ることはない。ああ、これこそが君主の地位を奪おうとする心が生ずる因である。大乱の起こる原因も、みな自分の分限内にあることに満足できず、自分の分限外にあるものを貪り、欲するためである。

故に学問において心を養う者は、まず己の分を知ることが必要である。分を知る者は心が常に穏やかであり、欲望は常に達成される。望むものが得られると、身は自然に安定し、何かを為すのに十分である。

(余説) この「知足安分」の考えは、権力者にとって都合のよい考え方だとする説があります。そういう面も確かにあり、消極的で安易な処世法かも知れません。しかし、身心の健康を維持して、与えられた命を全うするためには大切であろうと私は心得ています。

2 心は虚にして一点の渣滓なからんことを要す。心は實にして一毫の欠缺なからんことを要す。
(存心) 守屋 44

(意訳) 心は常に「虚」を保っておいて、わずかの雑念をも留めておいてはならない。一方、心は常に充実させておき、わずかの空白をも残しておいてはならない。

(余説) 心が雑念にとらわれていたのでは、冷静で的確な判断や行動は難しくなります。昔の剣豪が「無心」を極意としたのも、同じことだろうと思います。また、何か心にこだわりがあると、迅速な判断を誤ってしまいがちです。「虚」の効用はそこにあります。

一方、心が緩んで散漫していると、何ごとをも達成させることは困難な上に、過ちも招きかねません。この「虚」と「実」の効用をあらためて見直したいものです。

3 吾が輩の欠く所は、只是れ涵養すること純ならず定まらざるなり。故に言は則ち口を失す。発する所事に当たらず、物に循わず、人に宜しからず。事は則ち意を恣にし、行なう所、或いは太だ過ぎ、或いは及ばず、或いは理に悖る。

若し涵養し得て定まらば、正鶴を熟視して而して後に弓を開き、矢矢、的に中り、分寸を細量して而して後に針を投じ、処処、穴に中るが如し。これはこれ真正の体験、実用の工夫なり。沈静し了り発出し来たれば、件件都是れ天則なり。(存心)守屋42

(意識) 我々の欠点は、水が土に自然にしみこんでいくように、徐々に自分を養い育てることが不十分な点にある。だから、発言すれば的はずれ、行動を起こせば見当違いをやり、人のためには少しも役立たない。仕事をさせると気の向くままにやり、やったことはすぎたり及ばなかったりし、ときには道理に反することまでやりかねない。

ふだんから自分を十分に涵養しておけば、例えば弓において、的をしっかりと見定めて矢を発すればことごとく命中させ、鍼に例えると、入念に検討してから使えば、どこでも穴を外さないのと同じである。これこそが、真実の体験であり、実践的な修行なのである。これはすべて心を「沈静」にすることから生まれてくる。いったん心を沈静にして、そこから出発すれば、やることすべてが天の法則にかなうことになる。

(余説) 厳しい環境や訓練に身を置けば、自然に鍛えることができます。それを確実に効果あらしめるためには、まず自分の心を「落ち着いて静かにさせて、氣勢を鎮めなければならぬのだ」と教えています。心ここにあらずといった状態では、何も身につっこいません。これは、前条の「虚と実」の効用に通じるところもあります。

(参考) 呻吟語・存心 「静の一字は十二時離れ了らず。一刻もわずかに離るれば便ち乱れ了る。門は尽日開闔すれども枢は常に静かなり。妍媸は尽日往来すれども鏡は常に静かなり。人は尽日応酬すれども心は常に静かなり。ただ静かなり。故によく動を張主し得。若し動を逐いて去けば、事に応ずること定めて分曉ならず。便ち是れ睡る時も此の念静ならざれば、箇の夢兎を作すもまた胡乱なり」(疋田60)

「躁心・浮気・浅衷・狭量、此の八字は徳に進むの禁忌なり。此の八字を去るに、只だ一字を用ひ得。曰く静を主とす。静なれば即ち凝重なり。静中の境は自ずから是れ寛濶なり」

(安岡200)

4 駝は百鈞を負い、蟻は一粒を負う。各々その力を尽くすなり。象は数石を飲み、鼯は一勺を飲む。各々その量を充たすなり。君子の人を用うる、その効の同じきを必せず、各々長ずる所を尽くさしむるのみ。(広喩)守屋243

(意識) 駝は百鈞もの重さを背負うが、蟻はわずか一粒しか背負うことはできない。それどころも全力を尽くしている。象は数石の水を飲みますが、鼠はわずか一勺の水しか飲むことはできない。それでどちらも腹一杯飲んでいる。

良識ある人は、人を使う場合誰にも必ずしも同じような実績を期待しない。相手がそれぞれの長所を発揮できるように仕向けるのみである。

(余説) 人間の能力はそれぞれで異なっています。仕事でも教育においても、同じ鑄型にはめ込むようなことをせず、その最善を尽くし、持っている能力を引き出しすような配慮が必要です。しかし、現実にはその人の能力を見極めることは極めて難しく、安易な思い込みや判断はかえってその人を不幸にすることもあり、慎重な配慮が必要です。